は　じ　め　に

平成３２年度より始まる新学習指導要領の全面実施に向けて，平成２９年３月に新学習指導要領が告示され，小学校３・４年生に高学年の外国語科への動機付けを高める「外国語活動」が，５・６年生には定着を図る教科としての「外国語科」が導入されることとなりました。また，これまで５・６年生で３５時間設定されていた学習時間が７０時間になり，３・４年生でも新たに３５時間の時数が設定されることになりました。これまでは，コミュニケーションの「素地」を養うことが目標となっていたものが，「定着」をめざす「基礎」を養うことへと変わり，外国語の学習を通して何ができるようになったのかを明らかにすることが必要となってきました。

また，これまでの外国語活動においては，児童が単元の進出言語材料に「慣れ親しむ」ことに重点が置かれていた一方で，複数単元を通じた系統性が弱く，言語材料の使用が単元ごとで完結している場合が少なくなかったと言えます。つまり，各単元で学習した言語材料を次の単元で再び活用して自分の考えや思いを伝える場が設定されていなかったとも言えます。新学習指導要領に基づく外国語科の指導においては，言語材料の定着にも重点が置かれていることを考えると，児童が，現在学習している単元及び当該単元より前の単元で学習した言語材料を繰り返し使用できる場面を設定し，当該言語材料の一層の定着を目指すことが求められるようになってきました。

本研究委員会では，「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができる児童の育成」をテーマに，昨年度は「GT の効果的な活用を通して」という副主題で研究をして参りました。本年度は，上記の小学校外国語教育の動向を踏まえ，副主題を「基本的表現と対話を続けるための表現の工夫を通して」として前年度までの成果を活用しながら研究に取り組んできたところです。

具体的には，基本表現と既習表現（非言語によるコミュニケーションも含む）を①活動前の教師によるデモンストレーションに設定する。②基本表現と既習表現が児童に想起しやすいように掲示物にして提示し活用する。という２つの手立てを取ることで，児童がより自分の思いや考えを相手と伝え合うことができることを目指しました。その結果，児童は，基本表現だけでなく，これまで学習した表現を多く使って，自分のことを伝えることができるようになってきました。また，そのことによって，友達への理解がより一層深まった姿が見られました。しかしながら，教師が提示した既習表現のみに終始したり，まだ既習表現がうまく活用しきれなかったりする児童も少なくなく，手立ての更なる工夫が必要であると考えました。

このように，研究による一定の成果は見られたものの，課題はまだまだ山積しています。今後も英語教育の動向や外国語活動・外国語科に託された趣旨を踏まえ，先進的な実践に学びながら，更なる指導の工夫をした授業改善を行い，福岡市の英語教育の推進に資するという使命感をもって研究を進めて参りたいと思います。

最後になりましたが，本研究委員会の研究推進にあたりご指導ご助言をいただきました，福岡市立西花畑小学校 校長　本水　恭子 様，並びに研究授業に際し会場校としてお世話になりました校長先生方及び職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

小学校外国語活動研究委員会
委員長　　長門　直子